

スウェーデンにおける労働者階級の形成をめぐって

——労働組合運動と労働者文化（上）——

石原 俊時

1. はじめに

スウェーデンの労働者階級はどのように形成されてきたのであろうか、またその過程が如何なる特質を持つのであろうか。本稿では、労働組合運動の生成・展開と労働者文化についての研究史の整理を通じて、こうした問題にアプローチしてみたい。

労働者階級の形成については、資本・賃労働関係の生成に伴う即自的な労働者階級の形成から階級意識を持った向自的な労働者階級の形成を問題とするオーソドックスなマルクス主義歴史学に対し、その基底還元論的な性格を批判するE.P. トムソンに代表される社会史・日常史研究の興隆を経て、労働者階級の形成の経済的次元（資本＝賃労働関係の形成）、社会的・文化的次元（共通性と共属性の意識の獲得）、組織・運動形成の次元といった様々な側面を検討し、その相互関係を問題にする多元的かつ動態的なアプローチの必要性が強調されるに至っている¹⁾。本稿で労働

組合の生成・展開と労働者文化に注目するのは、労働者が、資本・賃労働関係の中に身を置き、職場の外でも工業化・都市化に伴う激しい社会変動に直面して、次第に社会的・文化的一体性を獲得し、主体的な組織形成の努力を重ねることによって、一方で労働組合運動を発展させ、他方で独自の文化を成立させてゆく過程に関心を持ったからにほかならない。つまり、労働者の主体的な組織形成という観点から、労働者階級の形成の経済的次元、社会・文化的次元、組織・運動の次元といった3つの次元を相互に関連づけて見てゆくことができないかと思われたのである。もとより、こうした課題を正面から論ずることは、現在の筆者の能力をはるかに超えており、本稿は、あくまでも労働組合運動の生成・展開と労働者文化についての研究史の整理という準備作業に過ぎない。

なお、このように研究史を整理するに当たり、以下の2つの点に留意したい。一つは、労働者階級内部の多様な性格を持った労働者の存在であり、もう一つは、労働者階級と中間層との相互関係である。労働者階級には、ギルドの伝統を継承する手工業熟練労働者や、機械に囲まれて働く工場の労働者、熟練が殆ど要らない様々な力仕事に携わり職場を転々とする労働者など多様な労働者が存在するのであり、こうした多様性は、労働組合運動の生成・展開にも、労働者文化のあり方にも大きな影響を持ったと思われる。また、スウェー

1) こうした労働者階級の形成史に関する研究動向については、八林秀一「西ドイツにおける最近の労働者史・労働者運動史研究の動向」（専修大学）『社会科学年報』第19号、1985年；山井敏章『ドイツ初期労働者運動史研究』未来社、1993年、序章；松村高夫「労働者階級意識の形成」柴田三千雄他編『社会的結合』（シリーズ世界史への問い4）岩波書店、1989年を参照。

デンの労働運動は、「国民運動 (folkrörelse)」の一つに数えられ、世紀転換期には、他の代表的な「国民運動」である自由教会運動や禁酒運動とメンバーを重複させつつ、人口の3分の1が関わったとも言われるまさに国民的な普通選挙権獲得運動を構成した。このことから察せられるように、スウェーデンの労働者階級は、中間層と密接な関係を持ちつつ形成されたのであり、中間層との相互関係の分析抜きにしては、その形成過程の特質は説明できないと考えられるのである²⁾。

そこで、本稿の構成は以下ようになる。即ち、次の第2節では、まず労働者階級が形成されてくる背景として、農業社会の解体と工業化の過程について極く簡単に触れ、それが労働者階級の形成のあり方を規定したと思われる点について若干触れておきたい。

第3節では、労働者をいくつかのグループに分類した上で、それぞれが担い手となった労働組合運動の生成と展開について概観し、スウェーデンにおける労働組合運動の発展の特徴についてまとめておくこととする。また、その際には、職場に生じたインフォーマルな集団である労働者の集合性 (kollektiv) に注目したい。この集合性は、職場における様々な問題、圧力に対応しつつ労働者が自発的に形成するようになった集団で、整った恒常的な組織の形を取るに至っていないが、集団内にはそれを律する規範が生まれ、労働組合運動成立の基盤となるとともに、独自の労働者文化の生成にも関連していたと思われる存在である³⁾。そこでここでは、この労働者の集

合性のあり方が各種類の労働者でどのように異なり、そのことがそれぞれが担い手となった労働組合の成立過程の差に如何に反映したのかという点に着目することとする。

第4節では、近年とりわけ盛んになった労働者文化をめぐる諸研究を検討してみたい。検討に際しては、職場以外での社会関係にも目をむけ、多様な形態での中間層との交流を通じて労働者が独自の文化を形成してゆく過程とともに、そうした過程の労働者グループ間の差異にも注目することとする。

以上のようにして、限られた視角からではあるが、これまで行われてきた研究を整理し、スウェーデンにおける労働者階級の形成過程ひいては労働者階級そのものの特質を解明する第一歩とすることが本稿の課題である。

2. 労働者階級形成の背景

(1) 農業社会の急速な解体と人口移動

スウェーデンは、かつてヨーロッパの辺境にある貧しい「小農の国」に過ぎなかった。表1でもわかるように、19世紀半ばまで都市人口の割合は10%余りであり、やっと1870年代になって工業化の本格的な展開、農業不況を伴う大不況の影響により、農村から都市への人口流入という形で急速に都市化が進むこととなる。さらにそうした人口移動は、図1に示されるように移民にも連動していた。移民は、1880年代にとりわけ激しくなり、今世紀初頭までにその延べ人数は、100万人を超したと言われる⁴⁾。それ故、スウェーデンに

2) 「国民運動」及び労働運動の「国民運動」としての展開については、とりあえず、拙稿「世紀転換期スウェーデンにおける禁酒運動の展開」岡田与好編『政治経済改革への途』木鐸社、1991年；拙稿「19世紀スウェーデン社会と労働組合運動」『歴史学研究』第626号、1991年を参照。
3) 集合性の概念については、I. Johansson, *Strejk som vapen*, Stockholm 1982, s. 22

-23; W. Korpi, *The Working Class in Welfare Capitalism*, London 1978, p. 150-154 を参照。この概念は、元来ノルウェーの社会学者 Sverre Lysgaard が提唱したものである。

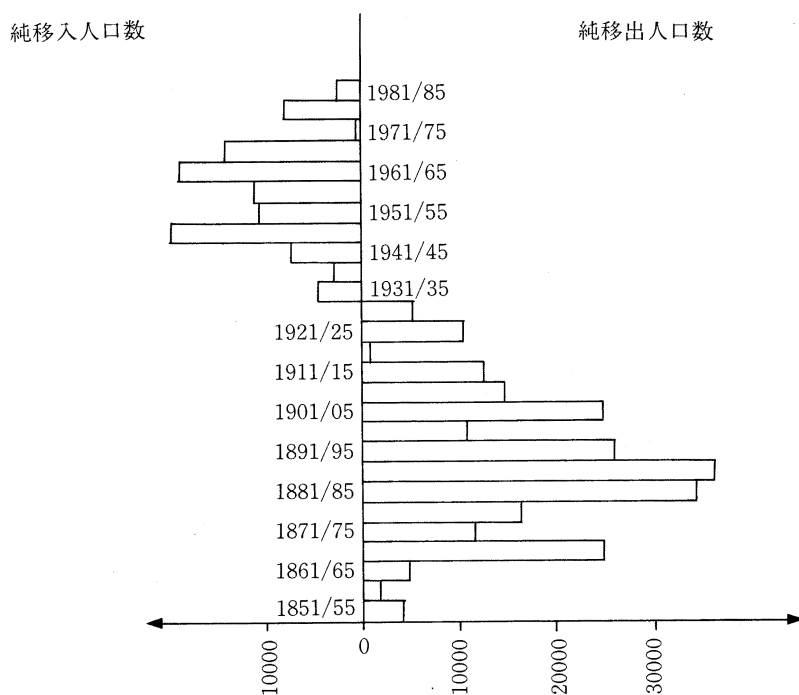
4) 移民については、とりあえず S. Carlsson & J. Rosen, *Svensk historia*, Del II, Stockholm 1961, s. 455-463 を参照。

表1 スウェーデンにおける職業別人口の変遷 {数字は千人の単位。ただし () 内の数字は総人口に占める割合%}

(G.A.Montgomery, *The Rise of Modern Industry in Sweden*, Stockholm 1939, p.61, 141)

	農業 {兼業も含む}	工・手工業	商業・運輸	その他	総人口
1751	1,425 (79.8)	137 (7.7)	33 (1.8)	191 (10.7)	1,786
1840	2,539 (80.9)	268 (8.5)	69 (2.2)	262 (8.4)	3,139
1870	2,996 (71.9)	613 (14.7)	211 (5.1)	348 (8.4)	4,169
1880	3,017 (67.9)	793 (17.4)	334 (7.3)	337 (7.4)	4,566
1890	2,973 (62.1)	1,038 (21.7)	414 (8.7)	360 (7.5)	4,785
1900	2,828 (55.1)	1,426 (27.3)	535 (10.4)	347 (6.7)	5,136
1910	2,697 (48.8)	1,766 (32.0)	741 (13.4)	318 (5.8)	5,522
1920	2,596 (44.0)	2,066 (35.0)	898 (15.2)	344 (5.8)	5,904
1930	2,417 (39.4)	2,195 (35.7)	1,117 (18.2)	413 (6.7)	6,142

図1 スウェーデンにおける年間純移出入人口 (5年間毎の平均値) の推移



(M.Larsson, *En svensk ekonomisk historia 1850-1985*, Stockholm 1991, s.13)

における労働者階級の形成は、このような急速な農業社会の解体を契機とした大規模な人口移動を背景としていたのである。工業化については、次の項で見ることにし、ここではこうした人口移動を生み出した農村の変化について若干触れておくこととする。

1870年代の農業不況は、スウェーデンの農業にとって大きな転換点となった。スウェーデンは、旧来穀物輸入国であったのであるが、18世紀末から19世紀前半までのエンクロージャー(skifterörelse)や開墾など農業革命とも呼ばれる過程を経て農業生産力を飛躍的に上昇させ、19世紀半ばにはオート麦を中心に穀物輸出を行うようになっていた。そして順調な耕地面積の拡大に見られるように、その農業は繁栄を続けていたのである。しかし、農業不況によって、穀物輸出が困難となるのみならず、アメリカやロシアの安価な穀物が流入し、穀物価格の低落によって穀物生産農家の経営が圧迫されてゆく⁵⁾。

こうした農業不況の中で、スウェーデンは、1888年には国内での自由貿易主義対保護主義の激しい対立の末に、1865年のフランスとの通商条約以来取られていた自由貿易政策を改め、農業保護関税を導入した。そしてさらに、スウェーデン農業は大きな変貌を強いられることとなる。それは、農業生産の近代化と穀物生産から酪農・牧畜への転換という形を取った。

1870年代以降、スウェーデンの農業では生産の機械化・合理化・集約化が進んだ。人口肥料の輸入量は、1876/80年の時期に比して、1906/1910年には8倍となり2万トンに上った。また、すじまき機、草刈り機、脱穀機などが普及し、根菜類(特に南部では砂糖大根)

の栽培を取り入れた輪作も広く取り入れられるようになる。そして例えばチーズの生産量が1890年から1900年の間に16百万キロから26百万キロに増大したように、酪農・牧畜への転換も進むようになった⁶⁾。

こうした農業経営の近代化や酪農への転換は、それには多大な資本を必要とするため、それに対応し得なかった小農の没落を促すとともに、労働力を節約し、余剰な労働力となった農業労働者層を農村から押し出してゆく⁷⁾。これが、大規模な人口移動の一つの大きな要因となった。さらにシェーンが指摘しているように、この時期の工業化の本格的な展開の中で、伝統的な農村工業(繊維・織物業)が決定的に衰退していったことも、その要因として加えるべきであろう⁸⁾。

一方、この人口移動によって引き起こされた都市化は、工業化の進展もあって、農業のための市場を拡大し、その転換を促進していったものと思われる。とりわけ図2で見られるように、後にも触れる1890年代からの工業の拡大期には、国内市場を基盤として経済成長

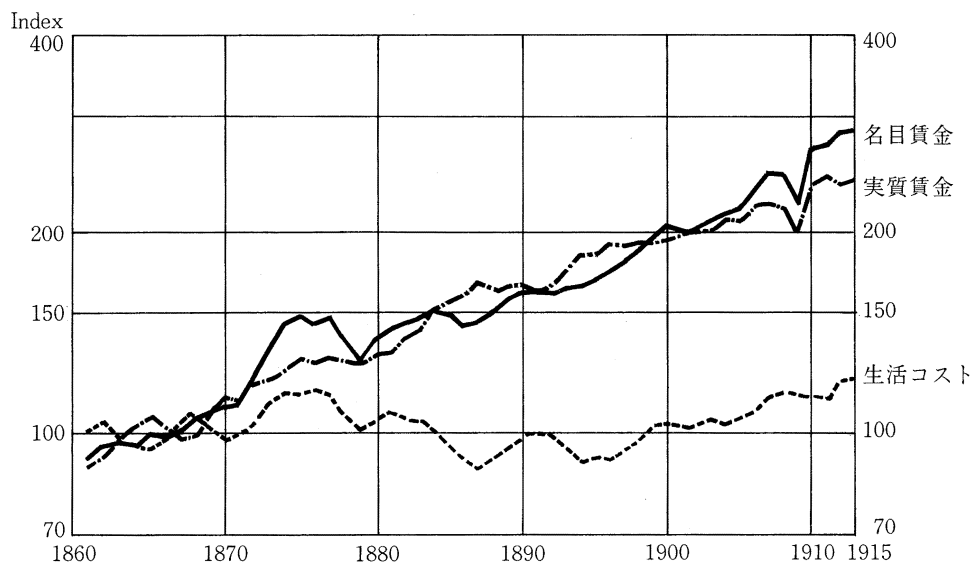
6) この時期の農業経営の近代化について、とりわけ機械化の側面に注目して検討したものに、J.Kuuse, *Från redskap till maskiner*, Göteborg 1970 がある。酪農・牧畜業の発展については、S. Carlsson red., *Bonden i svensk historia*, Del III, Stockholm 1956, s. 62-84, 350-356 を参照。

7) この時期の農民層の分解については、H.Seyler, *Hur bonden blev lönearbetare*, Lund 1983, s. 96-106 を、こうした農民層の分解が、1880年代には保護貿易対自由貿易の農民層内部における対立の背景になったことについては、J.Kuuse, "Mechanisation, Commercialisation and the Protectionist Movement in Swedish Agriculture 1860-1910", in: *Scandinavian Economic History Review* 1971:1 を参照。

8) L.Schön, *Från hantverk till fabriksindustri*, Lund 1976, s. 39-40.

5) 耕地面積の減少など農業の統計的数値を分析して、この時期の農業不況の深刻さを強調したものに、J.Svensson, *Jordbruk och depression 1870-1900*, Lund 1965 がある。

図2 スウェーデン男子工業労働者の年間所得の推移 (1861-70=100)



(T.Gårdlund, *Industrialismens samhälle*, Stockholm 1955, s. 357.)

が進み、労働者も含め、国民の生活水準が一般的に上昇したのであった。そのためこの時期に、製粉、蒸留、酪農、砂糖、醸造、精肉、製パン、マーガリンなどといった様々な食糧品工業が勃興してきた。スウェーデンでは、農業のこのような転換が都市化・工業化と相互的に進展していったのである⁹⁾。

(2) 工業化と労働者階級の形成

スウェーデンの工業化は、従来、国際自由貿易体制の下で、西ヨーロッパ諸国の工業化・都市化によって引き起こされた需要の増大を背景に、豊富な天然資源に基づき製鉄業と製材業を基軸として行われた輸出産業主導型の

工業化だと捉えられてきた。こうした伝統的な工業化の把握に対して、最近では18世紀以来繁栄していた繊維・織物業、金属加工業、木材加工業といった農村工業の展開に着目し、封建制の解体、農業革命の進展を契機とした国内市場の発展に基づく自生的かつ内発的な工業化の要因の重要性が指摘されてきている¹⁰⁾。両者の見解は互いに排除するものではなく、従来の見解は、1870年前後の好況以降の経済発展に注目しており、農村工業の発展については、それ以前の特に19世紀前半の農業革命の時期が問題となるのである。さらに従来より、1890年代からはむしろ国内市場に基づき工業発展が一層進んだことが指摘されているのであり、これを含めれば、スウェーデンの工業化は、とりあえず次の3つの局面を経て進んだと言うことができよう。

9) J.Kuuse, *Interaction between Agriculture and Industry*, Göteborg 1974, s. 8-20. 名目及び実質賃金、住環境などの側面から工業化期の労働者の生活水準の上昇を指摘したものに、T.Gårdlund, *Industrialismens samhälle*, Stockholm 1955, s. 351-392 がある。

10) 拙稿「スウェーデンにおける工業化の起源をめぐる」(東京大学『社会科学研究』第45巻, 第2号, 1993年を参照。

即ち、第一の局面は、18世紀末から19世紀半ばまでの農業革命の時代である。この時期に封建制の解体が進み、農民の下に余剰が形成されてくる。それを起点として社会的分業が進み様々な農村工業が展開してくることとなる。そしてその過程は、農業革命の進展により農民層の分解が進み、それを通じて国内大衆市場が形成されることにつながってゆく。繊維・織物業においては、こうした国内大衆市場の形成を背景に工場制度が確立していったのであり、金属加工業では、農村工業の発展の延長線上に、本来の工業化のための資本、企業者、熟練労働力が形成されてきたことが指摘されている。この時期は、繊維・織物業や金属加工業で見られたように、工業化のために必要であった国内市場や資本・熟練の形成で特徴づけられる、工業化の揺籃期として位置づけられよう¹¹⁾。

次の第二の局面は、従来の見解が着目した1870年前後の世界的な好況の中で、製鉄業・製材業といった輸出工業を中心に工業発展が進行した時期である。スウェーデンは、1865年のフランスとの通商条約によって、国際的な自由貿易体制の中に本格的に組み込まれ、その中でかつてない景気の上昇を迎えたのである。この時期には、株式会社形態が普及し¹²⁾、大量の外資を導入した鉄道建設も大いに進展してゆく¹³⁾。

第三の局面は、1890年代とりわけその後半から1900年代半ばにかけての国内市場に基づく工業発展の時期である。この国内市場を基盤とする経済成長には、1888年の農業保護関税の導入を契機とする保護貿易体制への復帰

の他、次の3つの要因が考えられる。まず第一に、1870年代以降鉄道建設が進み、1890年代からは水力発電所が建設され電力の使用が普及するなどインフラストラクチャーの建設が進んだことである。この点、電力の普及などに関して言えば、後進資本主義国スウェーデンにおいて、いわゆる第二次産業革命が西欧先進資本主義国と同時代的に進行したことが注目されよう¹⁴⁾。第二に、都市化により非農業人口が増大したことである。このことは、労働者を含む全般的な生活水準の向上とあいまって、繊維・織物業、仕立業、製靴業、食料品工業などの消費財産業の勃興をもたらすこととなる¹⁵⁾。第三に、特に機械工業の台頭との関係で指摘されることであるが、農業の集約化・合理化が、工業の発展を促したことである。機械工業は、このような農業機械を国産化し、今世紀にはさらに輸出を進めてゆくこととなる。また、機械工業の発展は、蒸気機関車や車両の生産やモーターの生産といった鉄道やインフラストラクチャーの建設・電力化の動きとも結びついていた。そして金属・機械工業は、伝統的な製鉄業・製材業に代わり、この時期から第一次世界大戦にかけてパルプ・製紙工業とともにスウェーデンの基軸産業となってゆくのである¹⁶⁾。

このようにスウェーデンは、3つの局面を経て工業化を進めた。工業化期の景気循環を研究したイエーベリイによれば、スウェーデンの工業化は、海外市場、国内市場の相互にバランスよく支えられながら、国際的な不況も比較的軽度で済まし、多様な産業部門の興

11) 前掲拙稿, 269, 271頁を見よ。

12) T.Gårdlund, a.a., s. 196-197.

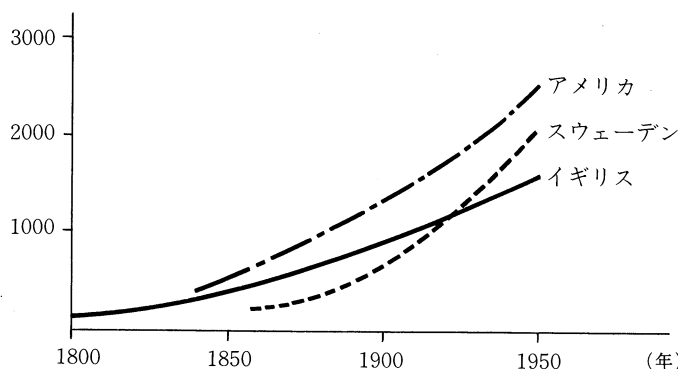
13) 例えば, B.Holgersson & E.Nicander, "The Railroad and the Economic Development in Sweden during the 1870's", in: *Economy and History* 1968 を参照。

14) T.Gårdlund, a.a., s. 150-161; C.G.Gustavsson, *The Small Giant*, Ohio 1986, Chap. III.

15) A.Montgomery, *The Rise of Modern Industry in Sweden*, Stockholm 1939, p.176-185; T.Gårdlund a.a., s. 136-143.

16) Ibid., s. 81-96.

図3 アメリカ、イギリス、スウェーデンの一人当たりの GNP の推移 (USドル)

(H.Runblom/H.Norman ed., *From Sweden to America*, Uppsala 1976, p.56)

隆を伴いつつ進行したのである¹⁷⁾。

一方、先に触れたように世紀転換期に金属・機械工業が台頭してきたのであるが、その特徴は、企業の多くが、スウェーデン人の発明や技術革新に基づき、概して発明家が自ら経営する「天才企業 (snilleföretag)」であったことである。電話や弱電技術で画期的な技術革新をなしとげたラーシュ・マグヌス・エリクソン (Lars Magnus Ericson) の「エ

リクソン (L M Eriksson)」や、ミルク分離機を発明したラヴァル (Gustaf de Laval) の「セパラトゥール (Separator)」(現在「アルファ・ラヴァル (Alfa Laval)」) などが有名である。そしてこれらは、スウェーデンにおける電力や電信技術の普及や農業の機械化、酪農への転換と結びついて発展した企業であった。また、このような企業は、パテントを取得し、関税障壁を避け、輸送コストを節約するために既に1900年前後から早期に多国籍化してゆく¹⁸⁾。

しかし、これらの企業は、国際的に見れば概して小規模なものであった。1913年の時点で資産規模で見たスウェーデンの企業ランキング4位で、国内最大の金属・機械工業の企業である「セパラトゥール」も、従業員数はわずか900人に過ぎなかった。金属・機械工業で従業員最大の企業である SKF 社 (ボルボは、1926年にこの子会社として発足した) でも1900人であった。同時期のドイツのクルップは、従業員数は約6万人であり、ジーメンスは、4万3千人であったのに比していかに小規模であったことがわかっていこう。ちなみにス

17) L.Jörberg, *Growth and Fluctuations of Swedish Industry 1869-1912*, Lund 1961, p. 361-363. スウェーデンの順調な経済発展は、図3でも推測できよう。しかし、スウェーデンの工業化過程をこのように楽観的にのみ捉えてはならないことは、大量の移民の問題や1870年代以降顕在化した「社会問題」の存在からいってもわかるであろう。なおスウェーデンは、第一次大戦までは、巨額な対外債務を抱え、貿易構造全体から見れば、鉄鉱石や木材等を主要品目とする原料・半製品輸出国であった。M. Larsson, *En svensk ekonomisk historia 1850-1985*, Stockholm 1991, s. 39, 60. この面では、工業国としてはなお限界を有していたのである。「社会問題」については、拙稿「1880年代前半におけるスウェーデンの自由主義と労働組合運動」『土地制度史学』第124号、1989年、26頁を参照。

18) M.Larsson, a.a., s. 38-39; C.G.Gustavsson, op.cit., p. 255-277.

表2 1899年エスキルストゥーナ (Eskilstuna) のムンクテル (Munktel) 工場における
労働者の出生地と父親の職業

(M.Isacson & L.Magnusson, *Vägen till fabrikena*, Malmö 1983, s.161)

職業	エスキルストゥーナで 生まれた者の数とその割合	父親が工手工業に従事 していた者の数とその割合	総計 (人)
《熟練労働者》			
旋盤工	29 (37%)	61 (77%)	79
他の機械工	17 (27%)	36 (56%)	64
やすり工	12 (13%)	46 (52%)	89
板金工	1 (6%)	10 (59%)	17
鍛冶工	0 (0%)	16 (67%)	24
铸造工	5 (10%)	35 (71%)	49
金属铸造工	5 (100%)	5 (100%)	5
塗装工	0 (0%)	8 (57%)	14
木型工	7 (30%)	14 (61%)	23
小計	76 (21%)	231 (63%)	363
《非熟練労働者》			
鍛冶工助手	0 (0%)	9 (36%)	25
板金工助手	2 (5%)	12 (31%)	39
铸造工助手	1 (4%)	1 (4%)	23
戸外労働者	1 (3%)	8 (22%)	36
小計	4 (3%)	30 (24%)	123
《総計》	80 (16%)	261 (53%)	486

ウェーデンの資産額トップの企業は、砂糖トラストで、従業員数8千人であった¹⁹⁾。さらにこのような多国籍化した企業の一方で、地域市場に密着した前工業化期の農村工業からの連続性をより濃厚に示す広範な中小企業が存在していたのである。1890年代以降の経済発展の中で、スウェーデン資本主義に早くも独占段階が訪れたと主張されるが、その場合独占といっても、砂糖トラストやマーガリンなどの食料品カルテルであり、資本の有機的構成が高く生産の集積・集中で特徴づけられる重化学工業での独占ではなかったのである。

工業全体で見ても、企業数の4分の3が、従業員数50人以下の小規模経営であった²⁰⁾。この時期のスウェーデンの工業は、むしろ広範な中小企業の存在で特徴づけられよう。

こうして世紀転換期スウェーデンにおいては、工場制が様々な産業に普及してきていた。しかしなお、手工業や前工業化期以来の農村

19) G.Therborn, *Borgarklass och byråkrati i Sverige*, Lund 1989, s.127-128.

20) S.Hentilä, *Den svenska arbetarklassen och reformismens genombrott inom SAP före 1914*, Helsingfors 1974, s.49-50. 第一次大戦以前のスウェーデンでは、工業において資本の集積・集中が進まなかったことについては、S.Lash & J.Urry, *The End of Organized Capitalism*, Cambridge 1987, p.29-35 を参照。

表3 1889年から1914年のスウェーデン社会民主党（SAP）と労働組合全国組織（LO）のメンバー数
(S.Hentilä, a.a., s.149)

	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896
SAP	3,194	6,922	7,534	5,630	6,571	7,625	10,250	15,464

	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1904	1905
SAP	27,136	39,476	44,489	44,100	48,241	49,910	64,835	67,325
LO			37,523	43,575	42,329	39,545	81,736	86,635

	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912
SAP	101,929	133,388	112,693	60,813	55,248	57,721	61,000
LO	144,392	186,226	162,391	108,079	85,176	85,176	85,522

	1913	1914
SAP	75,444	84,410
LO	97,252	101,207

表4 1896年から1912年における産業部門別のSAP、労働組合運動（LO系、非LO系を含む）の組織率（％）(S.Hentilä, a.a., s.149)

産業部門	1896	1898	1900	1902	1904	1906	1908	1910	1912
印刷	37.9	42.9	45.6	57.1	60.0	62.3	66.7	48.8	42.5
金属・機械	10.0	13.7	18.4	22.4	25.9	34.2	41.3	38.7	27.5
製靴				78.1	83.7	69.8	78.2	54.4	42.6
木材加工	42.9	62.9	39.3	41.6	56.5	78.8	89.0	50.4	53.7
タバコ	31.7	33.3	35.5	35.5	44.7	46.9	50.0	46.7	38.3
鉱山	1.8	2.0	3.3	3.6	4.5	12.5	14.2	10.3	4.1
石材加工		41.9	42.7	20.3	24.6	36.7	48.4	26.8	28.1
製材		10.8	3.5	3.7	4.3	23.1	29.8	10.3	12.7
手工業		7.0	6.8	8.9	11.1	20.0			
繊維		1.4	1.6	2.1	3.0	15.7	14.7	4.4	3.4
醸造			20.7	33.9	34.8	37.9	46.0	35.5	24.1
全体の労組組織率	8.8	18.9	19.4	19.6	27.4	46.3	56.2	30.6	31.0
LO			12.9	11.7	22.9	37.2	42.8	22.1	21.8
SAP	5.9	12.5	13.0	14.7	18.2	26.3	29.7	14.3	15.5

工業が広範に残存し、また伝統的な製鉄業の存在形態であるブルクが存続するといった、多様な生産様式が併存する状況が見られた。

しかもその工業発展は、これといった工業の中心地を持たない地理的分散性を特徴としていた。というのも、主要な輸出産業は製鉄業

や製材業であり、その立地は原料の所在に規定されていた。また、動力としては、製鉄・繊維・製紙・パルプなどの部門を中心に水力が重要な位置を占めていた²¹⁾。そして地域市場のために生産する製紙、レンガ、織物、金属加工等々といった小規模な工場や作業場が広範に存在していたのである。それ故、1890年代には、工業労働者の64%が農村に住んでいたという状況であった²²⁾。

このような工業化は、前項でも触れたように急速な農業社会の解体を伴っていたのであり、そのためこうした状況を背景に形成されてきた労働者階級は、様々な生産様式の併存と出自の多様性によって極めて不均質な構成を持っていた。ユニノーとマンヘイメルによれば、スウェーデンの労働者階級は継続的に農業や工業の小生産者から補充され、小ブルジョワのイデオロギーを保持していたという²³⁾。そうした状況は、表2からも察せられよう。

一方、表3及び4に見るように、労働組合運動による労働者の組織化が急速に進み、労働組合運動は、1880年代に本格的には始まったと言いうるのだが、1907年には、早くも世界で最も高い組織率を誇るようになる²⁴⁾。では次に、こうした労働者の組織化の経緯を見てみよう。

3. 労働組合運動の生成と展開

スウェーデンの労働組合運動は、工業化の基軸となり農村に立地していた製鉄業や製材業ではなく、1870年代に都市、とりわけストック

ホルム (Stockholm) の手工業熟練労働者を担い手として生成した。そして1880年代以降になると金属・機械工業や木材加工業の工場の熟練労働者も加わり、むしろこれらの労働者の労働組合が運動の中核となってゆく。

金属・機械工業の労働組合は、世紀転換期スウェーデンの労働組合の中で最も大きく、最もよく組織された組合であった。そしてその全国組織は、1897年には賃金プログラムを掲げ、全国的に組織的な賃金運動を開始し、1905年には、使用者の全国組織 (Verkstadsföreningen) とスウェーデンで初めて本格的に全国組織同志の団体交渉を行い、全国レベルでの協約を実現させ交渉手続きなどを定めたように、スウェーデンの労使関係の制度的枠組の展開をリードした存在であった²⁵⁾。また、金属・機械工業や木材加工業の労働者は、スウェーデンの社会民主主義労働運動における修正主義を担った労働貴族と呼ばれるのである²⁶⁾。では、何故それまでの基軸産業である製鉄業や製材業の労働者ではなく、これらの熟練労働者が労働組合運動をリードしていったのであろうか。

従来、手工業熟練労働者の間で何故労働組合運動が開始されたのかを説明する議論として一般的に用いられてきたのが、いわゆる相対的収奪論 (relativ deprivationsteori) である。これは、リンドボムが、その労働組合運動の生成から1900年頃までの展開を描いた古典的な著作において用いた議論で、労働組合運動は、工業化の中で最も抑圧を受け悲惨な生活を送る工場の非熟練労働者などではなく、工業化の中で従来の特権的な地位を脅かされた手工業労働者が先頭に立って推進されたというものである。工業化の抑圧の絶対的

21) T.Gårdlund, a.a., s. 159.

22) G.Gynnå & E.Mannheimer, *En studie i den svenska arbetarklassens uppkomst*, Lund 1971, Stencil, s. 36.

23) Ibid., s. 110-112.

24) K.Åmark, *Facklig makt och fackligt medlemskap*, Lund 1986, s. 110.

25) J.Lindgren, *Svenska metallindustriarbetareförbundets historia*, Del I, Stockholm 1938, s. 383-384, 624-638.

26) S.Hentilä, a.a., s. 309.

な大きさより相対的な地位の低下の方が労働者の組織化につながったのであり、その場合工業化以前の特権的な地位の防衛が、組織化の動機だと考えられたのであった²⁷⁾。

そこで、彼は、手工業熟練労働者によって担われた初期の労働組合運動を職業保護主義(yrkesprotektionism)と性格づけた。職業保護主義とは、初期の労働組合運動がすぐれて伝統的な手工業熟練秩序を維持せんとしたことを意味している。それらは、例えば、正規の職業教育を受けぬ「もぐり(fuskare)」の参入を規制し、安価な輸入品の流入を制限しようとし、大量の低価格・低品質な製品を生産しようとする企業家に反対していたのである。初期の労働組合運動は、こうした点で使用者と利害を同じくしており、彼らと協力しつつ伝統的な手工業熟練秩序の維持を目指していた。それ故、リンドボムのこのような初期の労働組合運動に対する評価は低く、それらは、労働者間の競争を抑止し、安定した賃金・生活水準の確保を使用者に対して要求してゆく側面をもつものの、伝統的な親方・徒弟間の連帯意識に基づいた階級意識が十分発達していない点で未成熟な労働組合運動の発展段階の存在だと位置づけられたのである²⁸⁾。このような相対的収奪論に対し、オーマルクは、工業化の影響をあまり受けなかった建築労働者で労働組合運動が早くから展開したことや、相対的収奪がより深刻な不況期に必ずしも労働組合の設立が盛んではなかつ

たことを説明しえないと批判している²⁹⁾。

一方、最近注目されている議論が、権力関係論(maktrelationsteori)である。これは、相対的収奪論のように労働組合に組織化する必要性に着目することのみでなく、現実組織しうる可能性を重視し、労使間の力関係の中で双方の権力資源(maktresurs—例えば、メンバーの数、リーダーシップ、資金量、熟練等々)の動員のあり方から労働組合の生成及び展開を説明しようとするものである。つまり、組織化の動機に加えその実現可能性も検討してゆくべきだという議論である。

このような権力関係論は、1970年代に始まったストックホルム大学の労働者階級の形成史を対象とした研究プロジェクトの中で、ストライキを分析する道具として用いられて発展した³⁰⁾。このプロジェクトでセーデルクヴィストは、労働者を手工業熟練労働者、工場労働者(熟練労働者ではない)、不熟練労働者に分類し、それぞれの労働者範疇のストライキ行動を分析し、何故そのようなストライキ形態を取ったのかを権力関係論を用いて説明しようとしたのである³¹⁾。こうした方法は、ヨハンソンのノルシェーピング(Norrköping)におけるストライキの研究に受け継がれてゆく³²⁾。そしてオーマルクは、労使間の力関係において特に労働力の交換可能性(utbytbarhet)に注目し、様々な種類の労働者の労働組合のメンバー数の変動の様子から、景気循環や大きな争議に対するメンバー数の安定性・不安定性を説明しようとした³³⁾。後には彼は、労使双方の戦略の選択という視点を加えて権

27) T.Lindbom, *Den svenska fackföreningsrörelsens uppkomst och tidigare historia 1870-1900*, Stockholm 1938, s. 37-42 ; J. Westerståhl, *Svensk fackföreningsrörelse*, Stockholm 1945, s. 25.

28) T.Lindbom, a.a., s.298-303. このような初期労働組合運動の評価がそれと自由主義との結びつきにも当てはめられたことについては、拙稿「1880年代前半」を見よ。

29) K.Åmark, a.a., s.62.

30) スtockホルム大学の研究プロジェクトについては、とりあえず拙稿「19世紀スウェーデン社会」, 128頁を見よ。

31) J.Cederqvist, *Arbetare i strejk*, Stockholm 1980.

32) I.Johansson, a.a.

33) K.Åmark, a.a.

力関係論を精緻化し、建築業における団体協約制度の確立過程を分析している³⁴⁾。

このように権力関係論を用いた研究は様々な発展してきたのであるが、この節では、労働組合運動の草創期にあって、労働者が労働組合をどのように組織し、組織を安定させていったかという視点から、労働者が如何にその集合性を生み出し、それを使用者の抑圧に対抗しつつ維持し発展させていったかという状況に注目し、様々な種類の労働者の労働組合への組織化を概観してみたい。というのも、そのような集合性が、労働者の主体的組織形成の前提となり、労働組合生成のための核となったと考えられるからである³⁵⁾。

さらにここでは、使用者の抑圧に対し労働者の集合性をどのように維持・確保していったかということに関して、特に次の2つの要因を重視したい。一つは、生産過程における労働者の地位であり、使用者に対して如何に自律性を確保しえたかということである。そこでは、労働者の持つ熟練が問題になるであろう。もう一つは、労働者グループ内のコミュニケーションの可能性ということである。同質の集団であれば、コミュニケーションの可能性は高まるであろうし、経営規模や分業の程度もそれに関わってくるであろう。

労働者の分類については、オーマルクが労働組合のメンバー数の変動の分析に際して用

いた分類に従うこととする。即ち、手工業熟練労働者 (hantverksarbetare)、工場熟練労働者 (yrkesutbildade fabriksarbetare)、工場不熟練労働者 (icke-yrkesutbildade fabriksarbetare)、屋外不熟練労働者 (grovarbetare) である。手工業熟練労働者とは、自分の手と道具で仕事をし、通常3年から4年の訓練を経て、代替の難しい技術を身につけたギルド以来の手工業的伝統を持った労働者である。工場熟練労働者とは、職業学校か年長の労働者の下で実践を積んで熟練を身につけた者で、このカテゴリーの出現は、工業化に伴う新たな職業の生成や工場における機械化・分業のある程度の進展を前提としていた。工場不熟練労働者には、熟練労働者の助手と分業によって単純化された作業を行う者の2種類あって、後者は前者のように、将来熟練を身につけ、熟練労働者となる可能性は、基本的には存在しない。最後に、屋外不熟練労働者とは、特別な職業教育を必要としない屋外で働く肉体労働者を指す³⁶⁾。

以下では、以上のように分類したうえで、まず製鉄業、製材業での労働組合運動の生成を見て、その遅れた理由を検討し、次に手工業熟練労働者をはじめとするそれぞれの種類の労働者の組織化について概観して、何故、最も早く手工業熟練労働者の労働組合が成立し、特に工場熟練労働者の労働組合が労働組合運動の展開をリードしていったのかという問題を考察してみることにする。そして最後に、スウェーデンにおける労働組合運動の生成・発展過程の全体的な特徴について、いくつかの点を指摘しておきたい。

(1) 製鉄業の場合

古くからの輸出産業である製鉄業の伝統的な生産形態は、ブルク (bruk) と呼ばれる。これは、輸出向けの棒鉄を生産する製鉄所を

34) K. Åmark, *Maktkamp i byggbransch*, Lund 1989.

35) しかし、労働者の集合性と労働組合の関係は、このように単純ではない。例えばコルピは、1960年代から顕著となった労働組合の指導層に対する卒伍層の反抗に関して、後者の人的なつながりを表わすのにも、集合性の概念を使っている。W. Korpi 1978, op.cit., p. 150-154. 本稿では、このような多様な側面すべてを扱うことはできず、とりあえず労働者の集合性の労働組合運動の生成につながる面だけにのみ注目することとする。

36) K. Åmark, a.a., s. 41-42.

中心に、穀物耕作や牧畜を行う農場や、燃料供給地としての森林からなる巨大な半ば自給的な経済単位であった。18世紀には、ロシアと共にヨーロッパの鉄生産を支配したスウェーデン製鉄業であるが、ナポレオン戦争以後、パドル法の開発などで鉄自給化を達成し、さらに海外市場を望むようになったイギリス製鉄業との競争にさらされることとなる。この時は、良質の練鉄（棒鉄）生産への特化、そしてランカシャー法などの技術の導入により、輸出産業としての地位を保った。しかし19世紀半ば以降には鋼鉄の時代が到来し、ベッセマー法など石炭に基づく製鋼法が開発され国際的にも普及してゆく。その中でスウェーデンにおいても、練鉄需要が減少し、これらの製鋼法の導入が強制され、木炭から石炭への燃料の転換を迫られることとなる。また、それによって資本の集積・集中過程が進んでゆく。1875年から1910年の間に、高炉の数は224から172に減少したのだが、生産量は35万トンから60万トンに増大したのである³⁷⁾。

このような技術革新、とりわけ燃料が木炭から石炭に転換されていったことや交通・輸送手段の発達、ブルクの性格を変え、その自給性を低めることとなった。しかし、なおブルク社会は、人里から離れた所にあった。それ故国際競争が激化する中で如何に熟練を持った労働者を確保するかが常に問題となっていた。そこで19世紀には、古くからのパターナルな労使関係が一層整った形態で展開することとなる。即ち、病氣や年をとって働けなくなった場合や一時的な失業の際に扶助が与えられる一方、賃金の多くは殆ど現物で支給され、無量の住宅が供給された。また、労働者が買い物をする場合もブルクの店舗（före-

tagsbutiker）が利用されたのである。このようにして労働者の生活圏にまで使用者のコントロールが及び、労働者は企業に結びつけられていた。それ故ブルクでは、熟練を持った労働者の世襲も行われていたという³⁸⁾。

こうした前工業化期以来のブルクでの熟練形成は、都市の手工業におけるギルド制度下の熟練形成とは性格を異にすると思われる。オーマルクの分類では、前工業化期の伝統というと都市のギルドしか考慮されていないのであるが、ブルクを含め前工業化期のスウェーデンで広範に展開していた様々な農村工業で培われた熟練や文化を、工業化や労働運動の生成・展開の中でどのように位置づけてゆくかは、後述するように金属・機械工業で農村工業との連続性が強調されていることもあり、今後検討してゆくべき大きな課題となろう。

ところで、製鉄業で労働組合が本格的に組織されてくるのは、やっと1900年前後のこととなる。このような組織化の遅れの原因は、まず第一に、こうした労使関係の中で、労働者の地位が安定していたことであったと思われる。例えば、パターンリズムが全面的に崩壊してくる1920年代まで、労働者は本格的な失業を経験しなかったという。しかも、ブルク社会の中では衣食住を握られ、使用者への従属は如何ともしがたいものがあり、そうした使用者のヘゲモニーに抵抗する基盤を形成するのは難しかった。さらに、こうした半ば孤立した社会では、外部からイデオロギーが伝達され、労働組合運動を組織する刺激を受けることも少なかったのである³⁹⁾。

リンドストレームによれば、ブルクにおける労働組合の成立は、このようなパターンリ

37) A.Montgomery, *Industrialismens genombrott i Sverige*, Ny och omarbetad upplaga, Stockholm 1947, s. 301-307; T.Gårdlund, a.a., s. 69-81.

38) M.Hellspong & O.Löfgren, *Land och stad*, Malmö 1974, s. 156-178.

39) E.Heckscher, *Svenskt arbete och liv*, Stockholm 1963, s. 272-273; M.Hellspong & O.Löfgren, a.a., s. 163-164.

ズムの弛緩と関連していた。即ち、技術革新や大規模化の中で、これまでの世襲的な労働者とは異なる多くの新しい労働者がブルク社会に入ってきた。また、協同組合や個人の店舗が設立されるようになる。こうして旧来の使用者によるコントロールの有効性が失われてきたのである。そして彼によれば、特に若い新参の労働者の間に使用者の知らぬ間にコミュニケーションの網の目が形成されてきた。それが、労働組合の成立につながっていったのである。また彼は、労働組合が成立し得た要因として、スウェーデン全土で労働組合運動が台頭してくる状況にあって、そうした労働者の組織化を容認し、それを前提に経営戦略を立ててゆこうとする使用者の意識変化もあったことを指摘している⁴⁰⁾。

(2) 製材業の場合

製材業は、19世紀半ばに、伝統的な製鉄業に対して新興の輸出産業として勃興してきた。1870年代には、その中心を従来のヴェルムランド (Värmland) からノルランド (Norrbotten) へ移し、蒸気製材機の普及を背景に生産力を高めていった⁴¹⁾。

ノルランドはスウェーデン北部の辺境であり、製材所は、ブルクと同様に概して辺鄙な場所に建てられた。そこでの労使関係における特徴の一つは、季節労働者の多さである。木材の伐採の便宜や港湾の凍結といった自然的要因に加え、製材業は、極めて景気循環に敏感であったといわれる。そこで、夏季に季節労働者を大量に集めて市場の動向に対応したのである。比較的温暖な南ヘルシングランド (Hälsingland) の製材所でも、全労働者

に占める季節労働者の割合は、1870年代に60-70%、1880年代でも50%に及んだという⁴²⁾。

こうした製材業を特徴づけるのは、非人格的な劣悪な労働環境だと言われる。製材業の労働者の労働条件・生活水準については、グスタフソンが、労働時間の他、賃金・生活水準、住宅などについて詳細な分析を行っている。金属・機械工業をはじめ10時間労働が普及しつつあった1890年代においても労働者は一日12時間、週にして60から70時間働いていたのであり、全国でも最低レベルの賃金水準であった。また、殆どの労働者の住居は極寒の地にあっても粗末なバラックで、しかも一家族に対して一部屋しか割り当てられなかったのである⁴³⁾。

しかし、辺鄙な場所に立地しているため、このように粗末ながらも常勤の労働者を含め労働者住宅が供給され、会社の店舗が小売業を独占した。製材業でも、労使関係にはブルクと共通したパターナルな要素も見られたのである⁴⁴⁾。

ところで製材業においても労働組合の成立は遅れ、本格的には1900年前後に始まった。一つには、概して労働者は、熟練を必要とせず、生産点において自律的な地位を持てなかったためだと思われる。劣悪な労働条件も、そのことが大きかったと推測される。製材業の労働者は、オーマルクの言う工場不熟練労働者に当たるのである。また、ブルクと同様に、半ば孤立した社会にあって使用者のコントロー

42) B. Rondahl, *Emigration, folkomflytning och säsongarbete i ett sågverksdistrikt i södra Hälsingland 1865-1910*, Uppsala 1972, s. 84.

43) B. Gustafsson, *Den norrländska sågverksindustrins arbetare 1890-1913*, Uppsala 1965 ; T. Gårdlund, a.a., s. 367-369.

44) G. Gynnå & E. Mannheimer, a.a., s. 39-41 ; M. Hellspong & O. Löfgren, a.a., s. 176.

40) Å. Lindström, *Bruksarbetarefackföreningar*, Uppsala 1979, Kap. 2.

41) T. Gårdlund, a.a., s. 97-105 ; L. Cornell, *Sundsvalldistriktets sågverksarbetare 1860-1890*, Göteborg 1982, s. 32-52.

ルが生活の領域にまで及んでいたことも留意すべきであろう。さらに、労働者は、季節労働者の割合が多く、しかも雑多な出自を持っていた。借地農や小作、農業労働者などの農村下層民やフィンランド農民などである。そのため、労働者の集合性を形成することは、著しく困難であったと思われる。労働者の多くは顔を故郷に向けていたのである⁴⁵⁾。

また、製材業は、大規模な争議が数多く起こったことでも知られている。スウェーデンで初めての大規模な争議となった1879年のスズバル(Sundsvall)ストライキは、特に有名である。これは労働組合に指導されたものではなく、常日頃からの劣悪な労働条件に加え賃金引き下げが企てられたことに対する、むしろ自然発生的なものであった。そして70年代前半においては、好況の中でこうした自然発生的な罷業も効果を収め、繰り返し行われていたことが、こうした大規模な争議の勃発の背景となった。しかしこのストライキは、使用者の強硬な姿勢やさらに軍隊の出動もあって鎮圧されてしまう⁴⁶⁾。

その後、1880年代に入り、初めて労働組合の結成が試みられることとなる。しかし、それに対して使用者の容赦のない弾圧が加えられた。製材業は、1898年や1899年の大争議に見られるように、団結権をめぐって労使の対立が最も激しく起こった部門なのであった⁴⁷⁾。一方ではまた、労働者の組織化の動きに対抗し、パターナリズムの方策の強化が行われた

ことも指摘されている⁴⁸⁾。労組の成立の遅れには、こうした使用者の態度も原因となったと思われる。

逆に、1900年前後に何故労働組合が成立し安定した存在となっていたかについては、次の要因が考えられる。即ち、1900年頃には製材業は、資源の枯渇や国際競争の激化の中で停滞に陥る。その中で生産をより加工度の高い製品に比重を移すとともに、生産性を高める努力がなされることとなる。その中で出来高賃金制が広範に導入され、常雇いの労働者も増えてくる。けれども分業や特化は進展しなかった。製材業は、景気循環に敏感で労働に季節性があるのであり、急速な変化に直ちに対応せねばならず、常勤の労働者を増やすにしても変化に応じてその職務をしばしば変える必要があった。それ故、製材業では、出来高制と広範な職務をこなす労働者の組み合わせで生産性の上昇が目指されたのである⁴⁹⁾。一方、こうした変化もあって、グスタフソンも指摘するように、労働者の生活水準が向上してくる⁵⁰⁾。このように、雇用が安定化し、生活水準も向上する中で確固とした労働者の集合性が形成しやすくなっていったと考えられるのである。

(3) 手工業熟練労働者

都市手工業におけるギルド以来の熟練秩序は、既に1846年のギルドの廃止以前から解体し始めていた。親方の家への住み込み、独身、遍歴といった旧来の職人の特徴や、パターナルな親方・徒弟関係の喪失が顕在化していたのである。そこにギルドが廃止され、1864年には営業の自由令が施行され、さらに1870年代からは、農村からの労働力の流入が激化することとなる。そのため、職人が生涯親方になれず、もはや職人が経過的な身分ではなく

45) Ibid., s. 174-175.

46) J.Björklund, *Strejk-Förhandling-Avtal*, Umeå 1976, s. 43-52 ; L.Cornell, a.a., s. 318-322.

47) Ibid., s. 322-327 ; J.Björklund, a.a., s. 102-136 ; G.Hulten, *Arbetsrätt och klassherravälde*, Stockholm 1971, s. 55-56.

48) A.Johansson, *Arbetets delning i Stocka sågverk under omvandling 1856-1900*, Stockholm 1988, s. 394-400.

49) Ibid., s. 404-416.

50) B.Gustafsson, a.a., s. 195.

なる状況が見られる一方、職人が勝手に独立し営業を開始する現象、独立営業者 (självförsörjare) 化も起こってくる。そして正規の手工業教育を受けぬ「もぐり」が、熟練労働者の職域を脅かし始めたのである。また70年代からの機械化・工業化の進展の中で、新しい職業が生成すると同時に、職業間の関係が再編成されてゆく⁵¹⁾。

ギルドの解体後、手工業熟練労働者も加わった様々な組織の展開が見られた。例えば、教師や新聞編集者など知識人が参加した、手工業者や労働者の啓蒙団体である啓蒙サークル (bildningscirklar) が、1840年代後半から1850年代にかけて全国に結成された⁵²⁾。また、手工業者、労働者を中心とする協同組合 (特に消費協同組合) も、60年代半ばに全国に相次いで設立された⁵³⁾。その頃には、勤労者協会運動も展開し始め、1880年代からは労働者協会運動も普及してゆくこととなる⁵⁴⁾。こうした中間層の指導する諸運動が展開する一方で、旧来の職人組織は扶助基金や娯楽組織として存続した。その中には、ストックホルムのパン職人の組織のように、労働組合に直接転化した事例も知られている⁵⁵⁾。扶助基金としては、こうした職人組織の後身のみならず、職業の枠を超えた一般向けの組織や、企業によって組織された基金も数多く活動していた⁵⁶⁾。

こうした旧熟練秩序の解体と新たな組織活動の展開という状況の下で、1870年頃から手工業熟練労働者を中心に労働組合運動が生成

し始めた。その多くが、ストライキの遂行を契機としていた。しかし70年代においては、なお組織の恒常性や規模、自助活動に重点があるなど限界があった⁵⁷⁾。とはいえ、ストックホルムのストライキを研究したセーデルクヴィストによれば、手工業熟練労働者は、工場の労働者、屋外不熟練労働者に比し、最も早く組織的かつ計画的なストライキを展開し始めたのである⁵⁸⁾。

このように手工業熟練労働者が、何故最も早く組織化し、最も組織的かつ計画的なストライキを遂行しえたかということについては、相対的収奪論で指摘されたような、旧来の熟練秩序の解体に伴うそれまでの特権的な地位を失う危機感や使用者との利害対立の顕在化に加え、以下の点を考慮すべきであろう。

まず、その保有する熟練によって生産過程において大きな自律性を確保していたことである。エクダールは、印刷業の労働過程の変化を、使用者の戦略と労働者の新しい労働生産組織への影響力行使の試みの対抗という観点から捉えようとした。その結果、労働者はそうした労働過程の変化に大きな影響力を持ち、機械化を妨げるのではなく、それを自らの意向に沿う形で導入することを望み、少なくとも今世紀初頭に至るまでそれを相当程度実現していたのである⁵⁹⁾。印刷業は、手工業熟練労働者が、機械化に積極的な態度を取り機械化に際しても生産過程に大きな影響力をもち続けた例として位置づけられよう。

次に、用語、衣服、シンボル、儀式などに代表される古くからの伝統的な職業文化を持ち、相互のアイデンティティの確立が容易であったことである。例えばスカーリン・フリェクマンは、イエーテボリイ (Göteborg) の

51) T.Söderberg, *Hantverkarna i brytnings-tid 1820-1870*, Stockholm 1955, s. 64-87, 103-104, 109-111, 133-135.

52) Ibid., s. 136-140.

53) B.Ragnerstam, *Arbetare i rörelse*, Del II, 1987, s. 110-138.

54) 勤労者協会運動及び労働者協会運動については、拙稿「1880年代前半」27, 29-30頁を参照。

55) T.Lindbom, a.a., s. 16.

56) Ibid., s. 343-344.

57) Ibid., s. 35-36.

58) J.Cederqvist, a.a., s. 81-87.

59) L.Ekdahl, *Arbete mot kapital*, Lund 1983, Kap. 5,6.

労働者文化の研究で、手工業熟練労働者の間には伝統的な職業文化が残り、労働者間の結びつきを強めていたことを指摘している⁶⁰⁾。

しかし、ここで留意すべきなのは、手工業的な伝統の労働組合運動の発展にとって持つ意義、即ち、職業保護主義の二面性の問題である。このことは、ノルシュピングのストライキを研究したヨハンソンも指摘している。手工業熟練労働者は、やはり早くから組織だったストライキを行うのであるが、一方では使用者との共通の帰属意識を持ち、使用者が技術革新を取り入れることには抵抗し、旧来のパターナルな親方・徒弟の関係を廃棄し即物的な資本・賃労働関係に転化してゆくことには反対していたのである⁶¹⁾。先に触れたエクダールの印刷業の研究もあるが、一般的にはこうした傾向が強いのではないと思われる。さらに自己の職種を超えての連帯には無関心な職業エゴイズムの存在も指摘されている。例えば、マルメー（Malmö）の手工業者史を研究しているエドグレンによれば、こうした手工業熟練労働者の職業エゴイズムが克服されてくるのは、旧来の熟練秩序が相当程度解体し、機械工場などで手工業作業所から手工業熟練労働者を集めるようになるなど、これらの労働者和其他の種類の労働者との生活状況が接近してはじめて進行したのであった⁶²⁾。このような階級意識の限界は、1880年代半ばにストックホルムの労働組合運動は、自由主義にかわり、社会民主主義を支持するようになるが、この時、あくまでも社会民主主義支持に反対し、地域の労働組合運動の中央組織であるストックホルム労働中央委員会

(Stockholms fackliga centralkommitté) を脱退していったのは、印刷工や製本工などの手工業熟練労働者の組合であったことにも現れているのではないと思われる⁶³⁾。

(4) 工場熟練労働者

ここでは、木材加工労働者と並ぶ工場熟練労働者の典型として、金属・機械工業の熟練労働者を対象として述べたいと思う⁶⁴⁾。

金属・機械工業について注目されることは、最近の農村工業史研究の進展の中で、前工業化期の農村工業からの連続性が強調されていることである。即ち、資本や企業家の出自、そして特に労働者の熟練の点で、農村工業と本来の工業化との連続性が注目されたのである。そうした議論によれば、そのような連続性を支えたのは、この金属・機械工業における工業化のあり方であった。金属・機械工業の工場では、かなり後まで機械化の程度は低く、機械は概して万能機械なのであり、手工業的熟練をなお多く必要としていたのである。また、多品種少量生産が行われ、流れ作業は未発達であった。即ち、機械化や分業がある程度は進んだとは言え、その工場は、労働者の農村工業以来の熟練に基づき、生産過程における労働者の自律性が保たれた、多品種少量生産の工場だったのである⁶⁵⁾。それ故、オーマルクは、機械化や分業の進展をこの労働者範疇のメルクマールとしたのだが、それは決して旧来の手工業的熟練の全くの解体を意味するわけではない。

このような工場熟練労働者の労働組合設立はかなり早く、手工業労働者について1880年代には始まる。そして、先述したように、この範疇に含まれる木材加工業や金属・機械工

60) B. Skarin Frykman, *Arbetarkultur - Göteborg 1890*, Göteborg 1990, s. 207-213.

61) I. Johansson, a.a., s. 97-99.

62) L. Edgren, "Hantverkarna och arbetarkulturen. En aspekt av klassformering", i: *Scandia* 56:2, 1990, s. 246-247.

63) J. Lindgren, a.a., s. 40-41.

64) 木材加工労働者については、拙稿「1880年代前半」を参照されたい。

65) 拙稿「工業化の起源」, 267-268頁。

業の労働組合は、スウェーデンの労働組合運動の展開をリードすることとなる。では、何故このように工場熟練労働者の労働組合が、労働組合運動で枢要な役割を果たせたのだろうか。それについては、次のような要因が考えられる。

一つには、労働者はその熟練に基づき生産過程で大きな自律性を確保していたことである。その点では、工場や屋外の不熟練労働者よりも組織化が容易であったと思われる。また、企業によっては、パターナルな労使関係が展開したことが知られているが、ブルクや製材所社会とは異なり、外部の社会から半ば孤立して立地しているわけではなく、生活の場の随所に使用者がコントロールを及ぼすことは、それほど容易ではなかったことが想像される。この点から、労働者の集合性が、製鉄業や製材業の労働者に比して形成しやすかったと考えられるのである。

しかし、手工業熟練労働者との比較で言えば、ギルドの伝統が弱いあるいはなく、そのような独特な伝統的職業文化とは縁が薄かった。このことは、オーマルクが指摘した、工業化に伴う職種間関係の再編成及び機械化や分業の進展を前提としていたことは言うまでもないだろう。またその工場では、熟練労働者であれば、農村工業や都市の手工業に携わっていた者が多く、不熟練労働者であれば、近郊の農業労働者が多かったとその差も指摘されるのであるが、概して工場熟練労働者は不熟練労働者と同様に様々な出自を持ち多様な文化的背景を持つ労働者からなっていた。こうした点から見れば、その労働者間の凝集性は、手工業熟練労働者よりも弱いものであったと考えられる⁶⁶⁾。

とはいえ、ギルド的な伝統に欠けているこ

とは、むしろ伝統に固執しない進歩性を持つことにつながり得るのであり、手工業熟練労働者のように職業保護主義に縛られることは少なかったと思われる。また、鍛冶工がしばしば板金工を兼ねるといった職種間の移動もあり、古株の労働者の労働を見ながら、新入りが仕事を覚えるといった独自の熟練養成システムが存在し、助手として存在した不熟練労働者の多くは後には熟練労働者となっていた⁶⁷⁾。そうした点から言えば、工場全体の労働者間の職種を超えた凝集性はかえって強かったと思われる。木材加工業や金属・機械工業の労働者は、当初から産業別組合を指向して

67) Ibid., Kap. 2.

68) J. Lindgren, a.a., s. 87 ; T. Lindbom, a.a., s. 67-68. こうした工場熟練労働者を手工業熟練労働者と範疇として区別することには、なお一言注意が必要であろう。というのも、しばしば両者は区別されず議論され、実際にも両者の間の境界ははっきりしなかったのである。例えば、工場熟練労働者の所属する代表的な産業部門である金属・機械工業や木材加工業には、鍛冶工や家具製造工といったギルド的伝統を強く継承する職種が存在していた。さらにこれらの産業部門には、工場とは言えない、小規模な手工業的作業所が広範に存在していたのである。ストックホルム大学の労働者階級形成史のプロジェクトでは、熟練労働者といえば手工業熟練労働者のことで、工場熟練労働者というカテゴリーは無く、工場労働者といえば工場不熟練労働者のことであった。例えば、J. Cederqvist, a.a., s. 60-61, 64. しかし、同じく両者の区別をしていないハンソンが、金属・機械工業や木材加工業の労働者の労働組合の組織形態が通常的手工業熟練労働者のものと異なることを指摘しているように、両者の間には熟練形成のあり方、労働組合の組織形態、さらには労働者文化の性格にも違いがあったと思われる。S. Hansson, *Den svenska fackföreningsrörelsen*, Stockholm 1932, s. 27-31. こうした点については、次の節でも言及することとなるが、今後さらに検討してゆきたい。金属・機械工が形成

66) M. Isacson & L. Magnusson, *Vägen till fabrikerne*, Malmö 1983, s. 20-24. また、表2を参照。

ゆくのである⁶⁸⁾。このようなことから、工場労働者の労働組合がスウェーデンの労働組合運動の展開をリードしたのだと考えられよう。

(5) 工場不熟練労働者

ここでは、繊維・織物業の例を取り上げ、工場不熟練労働者について見てみたい。

一般にこの種類の労働者は組織化が著しく遅れ、労働組合が成立しても弱体であった。ヨハンソンのノルシェーピングのストライキ研究においても、手工業労働者や屋外不熟練労働者に比しての組織化の遅れと使用者に対する弱さが指摘されている⁶⁹⁾。

そうした組織化の遅れと労働組合の弱体性は、何によるものであろうか。しかも、この産業部門においては、労使関係にパターナルな伝統は弱く、労使の利害の対立は明確に現れていたと指摘されているのである⁷⁰⁾。それについては、以下の要因が考えられる。

まず、機械化の過程で熟練の必要が殆どなくなったことである。イエーランソンの研究によれば、「マニユファクチャー」から工場への移行によって、その労働力の編成は、男子熟練労働者の下で婦女子が働くというものから、熟練が解体されて、男子の監督者の下で婦人労働者が機械を操作して働くというものに変化していった⁷¹⁾。そのため、生産過程における労働者の自律性は著しく弱まったと思われる。不況時には、使用者によって簡単に賃金を引き下げられ、解雇されたのである⁷²⁾。さらに、イエーランソンの研究でも分

かるように、労働力の主要な部分を女子が占めていた。女子の生産の場における地位は男子よりも低く、劣悪な環境の下で低賃金労働に甘んじていたのであり、組織化にあたっては、男子の労働者との対立の局面も見られた。このように労働力の構成から言っても、労働者の集合性は形成し難かったのである⁷³⁾。

(6) 屋外不熟練労働者

このグループの労働者の組織化は、比較的早く始まり、ストックホルムでは1880年代半ばに港湾労働者などで労働組合が設立され始める。しかしその労働組合組織は、オーマルクの指摘するように、弱体で不安定な存在であった。例えば、1902年から1907年までの好況期には、このグループの労働者の労働組合は、メンバー数を692%増加させた。けれども、1907年以後不況となり、1909年の大ストライキで労働組合運動が敗北すると、1907年から1911年までにメンバーの3分の2がいなくなるという有り様であった⁷⁴⁾。

チャー」については、拙稿「工業化の起源」、254-255頁、256頁注(2)を参照。

73) I. Johansson 1982, s. 173-174. こうした男女の対立が、両者の間の労働者文化のあり方の差にもつながったことも指摘されている。B. Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, Stockholm 1993, s. 273-274. なお、伝統的な繊維・織物業地帯であるヒューヘラード(Sjuhärads)地方の中心地ボーロース(Borås)で労働組合運動の成立が遅れた理由は、従来地域の文化的・宗教的特質に求められてきたのであるが、繊維・織物業が中心である産業構造にその原因を見いだすべきことを強調した研究として、R. Jungen, *Vävarstad i uppror*, Borås 1978がある。

74) K. Åmark, a.a., s. 71, 93. 1909年の大ストライキ(storstrejken)は、折からの不況の中で、失業者が増加し、1890年代以来上がり続けた賃金が、実質のみならず名目賃金においても下がるようになったことで労働者の不満が高

した労働者文化については、別稿を予定している。

69) I. Johansson, a.a., s. 110, 127.

70) G. Gynnå & E. Mannheimer, a.a., s. 47-48.

71) A. Göransson, *Från familj till fabriker*, Lund 1988, Kap. 2.

72) I. Johansson, a.a., s. 105-110. この18世紀の重商主義政策に起源を持つ「マニユファク

そうした労働組合の組織の弱体性や不安定性は、何よりも屋外不熟練労働者の性格に求めなければならないだろう。オーマルクの言うように、このグループの労働者はこれといった熟練は必要ではないため交換可能性が高く、容易に他の労働者に代えられえたのであり、使用者に対して弱い立場にあった。そして、概してその仕事には季節性があり、景気循環にも敏感で、労働者は頻繁に移動したのである。また、その多くは農村や他の都市から流入してきた雑多な下層民から構成されていた。さらに、こうした不安定な就業の中で、容易に救済の対象となり、ついには浮浪者や犯罪者となる者もいたのである⁷⁵⁾。こうした労働者の性格に規定されて、その集合性は著しく不安定なものであったと思われる。

そうした中で、特異な存在としてしばしば言及されるのは、港湾労働者である。例えば、ヨハンソンのノルシェーピングの研究でも、港湾労働者は、1890年に労働組合を設立し、翌年には協同組合を創立していた。そして、自己で道具を買い、自ら職長を選ぶ一方、入職規制を行ってノルシェーピング及びその近郊の労働者のみが組合に参加しうるように定めていた。彼らは、使用者に対して労働過程での自律性を強めると同時に雇用の不安定性

を克服しようとしていたのである⁷⁶⁾。

ヨハンソンは、こうした港湾労働者の労働組合の強力さを、まず第一に、雇用の不安定性がかえって集団的な解決の必要を高めたこと。そして、そこでは分業が進まず、その点では均質な集団が形成しえたこと。さらに港湾労働者の場合、使用者が小規模で相互に競争しあい、参入にそれほど資本を必要としないという事情があり、力関係は労働者に有利であったことに求めている⁷⁷⁾。また、ヨハンソンは指摘していないが、次節で触れるように、港湾労働者は、他の屋外不熟練労働者にはない独自の職業文化を持っていたことも考慮するべきであろう。

以上のように、スウェーデンの労働組合運動は生成・展開していった。その労働組合運動の発展全体に関して指摘すべきことは、イギリスとは異なり、クラフト・ユニオンの伝統が弱いことである。1870年代に手工業熟練労働者が労働組合を設立し始めるのだが、組織の恒常性や規模、活動の内容などで限界のある存在であった。またリンドボムの指摘するように、1880年代に入り安定した組織を持つに至った手工業熟練労働者の労働組合も、折からの農村からの労働力の流入の中で入職規制ができなかったのである⁷⁸⁾。一方その頃には、工場熟練労働者が労働組合を持ち、80年代半ばを過ぎると屋外不熟練労働者が組織化を始める。そして世紀転換期にはスウェーデンの労働組合運動をリードするのは、むしろ木材加工労働者や金属・機械労働者の産業別組合となってゆく。即ち、スウェーデンにおいては、手工業熟練労働者の労働組合が入職規制の実施に苦しんだように弱体であったのみではなく、労働組合運動を手工業熟練労働

まり各地で争議が頻発するようになったことと、今世紀初めに使用者団体の全国組織が結成され、それまで労働運動に対し守勢にまわっていた使用者勢力が巻き返しを図り、不況に乗じて大規模なロックアウト戦術を取ってきたことが背景となって起こった。争議はほぼ一カ月間続き、30万人の労働者がそれに巻き込まれた。結果は、労働者側の敗北に終わり、労働組合全国組織(LO)のメンバーは大幅に減少することとなる。大ストライキの背景及び経緯については、B. Schiller, *Storstrejken* 1909, Göteborg 1967を参照。

75) B. Horgby, *Den disciplinerade arbetaren*, Stockholm 1986, s.56, 93-94.

76) I. Johansson, a.a., s. 180-182.

77) Ibid., s. 188-193, 241-243.

78) T. Lindbom, a.a., s. 316.

働者がリードした時期が短かったのである⁷⁹⁾。

一方、このように展開した労働組合運動は、早くも1907年までには世界一の組織率を誇るまでに成長する。前節で述べたようにスウェーデンの労働者は、多種多様な出自を持った不均質な構成でもって特徴づけられるのであるが、それが急速に組織化され共通の利益を追究していったのである。さらに1880年代に設立され始めた職業或いは産業別の全国規模での労働組合組織(fackförbund)は、90年代になって多くの部門に普及してゆく。そして1898年には、労働組合全国組織(LO)が成立することとなる。労働組合による労働者の組織化は中央集権的な組織の形成を伴って進

行したのである。ボー・ストロートは、スウェーデンの労働者階級の階級意識の特徴として、イギリスの労働者は同一の職業、職場、地域の枠にしたがってアイデンティティを確立し、労働組合もそれに沿って成立しているが、スウェーデンではボイラーメーカーも旋盤工も大工も自らを何よりもまず労働者と呼ぶことを指摘している⁸⁰⁾。このような特徴を持つ階級意識の形成は、以上のような労働組合運動の生成・展開が背景にあったと思われる。では次に、こうした労働組合運動の展開を踏まえ、労働者階級の形成を、それが担った文化という観点から検討してみることにする。

(未完)

79) スウェーデンにおいて産業別組合の組織原理が早くから普及し、労働組合運動の中で支配的なものとなっていったことを強調するのが、ヴェステルストールである。彼によれば、既に労働組合運動の生成期から産業別組合が存在し、しかも今世紀初頭にはLOで、労働組合の組織原理は原則的に産業別組合であるべきとされ、その他の組織形態を持つ労働組合の再編が決議されたのである。また、こうした動きは、使用者側の組織化とそれとの集権的な団体交渉の進展にも対応しており、必ずしも労働運動における急進的な勢力の台頭と結びついてはいなかった。J.Westerståhl, a.a., s.44-46, 54-58. しかし、そうした過程で完全に職種別組合の伝統が無くなってしまったわけではなく、例えば、こうしたLOの決議は激しい抵抗を生んだのであり、金属・機械工の労働組合の内部でも様々な摩擦が存在していた。J.Lindgren, a.a., s. 455-458. 多様な性格を持った職業が存在することから考えても、こうした組織原理がすべての産業部門に貫徹しうるものではなかったことは確かである。実際、こうしたLOの決議の結果は、産業別組合のさらなる普及をもたらしたが、戦間期においても完全には実現しなかったのである。J.Westerståhl, a.a., s. 51-58. しかし以上の事を留意した上で、ヴェステルストールの主張は、スウェーデンの労働組合の

発展の特徴を示すものとして重視されるべきと考える。

80) B.Stråth, "Liberalismen och modernisering av Sverige", i: *Liberala perspektiv*, Höganås 1990, s. 247.